

主題：教会とは：福音に生きる

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1 章 27 節

●ペテロに対するパウロの抗議 ガラテヤ 2：11－14

先週に引き続いて、この朝も私たちは教会に欠かせない四つの柱となるものを学んでいきたいと思えますけれども、その前に、かつて起こったある一つの出来事を見てみたいと思います。ひとりの神学者はこの出来事を間違いなく新約聖書の中で、最も緊迫感に満ちた劇的なエピソードの一つと表現しています。その出来事というのは、パウロが人々の前でペテロに面と向かって抗議をした場面です。その時の様子がガラテヤ 2：11－14 に記されていました。この箇所を読みながら、パウロがペテロに向かって激しく抗議していた原因は、いったい何だったのかを考えてみてください。このように記されています。

「：11 ところが、ケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。：12 なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。：13 そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに本心を偽った行動をとり、バルナバまでもその偽りの行動に引き込まれてしまいました。：14 しかし、彼らが福音の真理についてまっすぐに歩んでいないのを見て、私はみなの前でケパにこう言いました。「あなたは、自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生活せず、異邦人のように生活していたのに、どうして異邦人に対して、ユダヤ人の生活を強いるのですか。」と。

さて、パウロの抗議を引き起こしていた原因はいったい何だったのでしょうか？その原因は、ペテロが「福音の真理」についてまっすぐに歩んでいなかったことでした。問題は、「福音の真理」を知らなかったことではありません。「福音の真理」を知っていながら、それに相反する歩みを実際になしていたこと、それが大きな問題だったのです。改めて思い返してみてください。ある意味、このペテロという人物ほど、「福音の真理」を知っていた人はいないと言っても過言ではありませんでした。ユダヤ人と異邦人との間にずっと存在していた深い隔たりや敵対心、そういったものがキリストにあって、もうすでに取り去られてしまったのだという喜びの事実を、本来であれば彼はだれよりもわかっていたはずでした。というのも、彼はその教えをある日の屋上で見た幻を通して直接神様から聞かされていたのです。その時の様子が使徒 10：11－15 に「：11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。：12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。：13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。：14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」：15 すると、再び声があって、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」、このように描かれていました。

この出来事があった後、ユダヤ人のペテロは、異邦人の百人隊長だったコルネリオの家を訪れることになりました。そしてそこにも同じようにして救いがもたらされたことを彼は目撃することになります。その時の驚きをペテロ自身もこんなふうと同じ使徒 10：34－36 で記しています。「：34 そこでペテロは、口を開いてこう言った。「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、：35 どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。：36 神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。」と。「このイエス・キリストはすべての人の主です」と言ったのです。ですからペテロは福音の教理というものを知らなかったのではありません。キリストが成し遂げたみわざのすごさを何もわかっていなかったのでもありません。彼は個人的にイエス様と時間を過ごしましたし、この方こそす

べての人の主であるということ信じ、そしてその真理を人々の前でも語り続けていました。信仰によってのみ救いが与えられるというすばらしい知らせを宣べ伝え続けていたのです。ましてやペテロは選ばれた十二弟子のうちのひとりでもありました。でもそんな彼でさえ「福音の真理」から外れてその道をまっすぐに歩んでいないことがあったということです。キリストに立ち続けるのではなくて、人の目を恐れてかつての習慣に流され、真理を妥協して、壊されたはずだったユダヤ人と異邦人との壁を自らの手で作り上げるような行為をとることがあったということです。そして結果として、福音の力を知っている者のとった正反対の行為は、その福音の力を実質否定するものになりました。だからパウロは面と向かって真理を守るために抗議したのです。

そして、このパウロとペテロの間に起きた一連の出来事は、私たちにもとても大切なことを教えてくれます。それは単にキリストの福音を知って、それを信じているということと、その福音を生き続けているということの間には大きな違いがあるということです。この二つは同じではありません。もちろん私たちの行い、良いわざがそれぞれに救いをもたらすことは決してありませんけれども、同時に福音を信じて救われた者は、その「福音の真理」に堅く立ち続けるだけでなく、その真理に立って忠実に歩み続けていくことが絶対に欠かせませんでした。言いかえると、あなたは「福音の真理」を知って受け入れているかだけでなく、その真理に実際に歩み続けているかがいつも問われるということです。あのペテロですら、時に道につまずくことがありました。だとしたら、果たして私たちは今、「福音の真理」をそもそも正しく知っているのでしょうか？そして知っているだけでなく、「福音の真理」にまっすぐ歩んでいるのでしょうか？そもそもひとりの信仰者として、また教会として、このキリストの福音に立って、福音を忠実に歩み続けていく、忠実に生きていくというのは具体的にどのような生活を言うのでしょうか。そのことをきょうはみことばから改めて考えてみたいと思います。

## ○二つ目の柱：福音に生きるとは

前回、私たち、さまざまな働きをなす上で、心に留めておくべき教会の一つ目の柱として、「主の栄光のために生きること」を見ました。今回は二つ目の柱です。それは「福音に生きる」ということです。その姿をわかりやすく私たちに描いてくれているピリピ1：27から学んでみたいと思います。

きょうの聖書箇所ですが、今回は1：27の特に前半部分だけに注目してみたいと思いますけれども、一つの流れとして押さえておくために27-28節をお読みします。

### ピリピ1：27-28

「:27 ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができますでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、:28 また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。」

さて、今読んだ27節のところから、私たちは福音に生きていくこと、福音生活に関して重要な三つの要素を見て取ることができます。まず「福音生活の不可欠性」、二つ目に「基盤」、そして三つ目に「描写」です。それぞれどういうことなのか順を追って考えてみましょう。

#### 1. 福音生活の不可欠性 27 a 節

まず、一つ目の要素として福音生活の不可欠性です。言いかえるなら福音に生きていくということは、例外なくひとりひとりにとって決して欠かせないものだということです。パウロは27節を「ただ一つ」ということばで始めていました。このことばは文字どおり、「唯一」とか「たった一つ」といった意味が含まれています。要するに、「いろいろなものに目を留めよう」ではありません。パウロはここで信仰者たちに向かって、ほかのどんなものよりもただ一つ、これにだけ焦点を向けていなさいと訴えたのです。このピリピの手紙を記した時、パウロはローマによって捕らえられ、自宅で軟禁状態にありました。キリ

ストの福音を忠実に語り続けてきたパウロは、その福音のゆえに理不尽に捕まえられて、皇帝の前で裁判を受けるまでの間、常に鎖につながれていたのです。彼には自分の将来がどうなるのかは何もわかっていませんでした。裁判の結果次第では、苦痛を味わって処刑され、殉教していく可能性も大いにあったのです。死は間近に迫っていました。その状況を目の前にして、恐怖や失意というものを抱いてもおかしくないような中にいました。でもそんな中であっても、パウロ自身は何も変わりませんでした。いや、それどころか、むしろ彼は二つの願いの間で板挟み状態になっていました。

どんな願いだったかという、一つはいのちが絶たれて世を去れば、今すぐに天でキリストとともにいることができるという願い、そしてもう一つはいのちが続いて世に残ることができるなら、キリストやピリピの兄弟姉妹に続けて仕えることができるという願い。この二つの間で葛藤していたのです。すごいと思いませんか？まさに目の前に自分の死が迫っていて、心に大きな不安を抱いてもおかしくないような状況においても、彼が心にかけていたのはこの二つのものでした。キリストと兄弟姉妹のこと、この二つの思い、いや期待の間で彼は葛藤していたのです。パウロの関心は、どんな時も自分のこと以上に、愛する主のことにありました。同じ主によって召された兄弟姉妹たちのために働いていくということは何よりも喜びとしていたのです。だからこそ、ピリピでも有名な箇所の一つだと思えますけれども、ピリピ1：21で彼は大胆にこう言うこともできました。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」と。

そのような状況に置かれていたパウロが、ピリピの信仰者たちのことを覚えて発言したのが、「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい」だったのです。つまりここでのパウロの訴えというのは明白でした。兄弟姉妹の皆さん、私は自分の身に何が起こるかわかりません。離れたまま死を迎えることになるかもしれないし、生きながらえてまた会えるかもしれません。でも私の身にたとえどんなことがあったとしても、これだけは忘れないように、ただこれだけは目を留めてくださいと。キリストの福音にふさわしく生活していくこと、ただこれにだけ心を留めているようにと。ですから福音生活というのは、この当時の信仰者たち、教会の歩みにとって補足的なものではありません。これは彼らにとって必要不可欠なものでした。これは今の私たちにとってももちろん同じです。私たちにとっても福音生活というのは、いつも欠かせない重要なものだと言うのです。

## 2. 福音生活の基盤 27b節

次に、二つ目の要素は、福音生活の基盤です。すべての信仰者にとって欠かすことのできないこの生活、この歩みを支えてくれているものはいったい何だったのか——それはもちろんキリストの福音でした。パウロは27節の続きにこう言います。「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく」と。ある意味、私たちの耳には当然のことのように聞こえるかもしれませんが。でも家にとって、その土台というものがすべてであるように、信仰者にとって福音というのはすべてでした。良い知らせである福音は、いろいろある大切な知らせの中のうちの一つではありません。歴史上、最も重要な最高の知らせでした。ではなぜ私たちにとって福音は良い知らせなのでしょう？それは福音のうちにのみ、罪人の私たちを救い、新しく造り変えるキリストの愛を、神様の恵みの力というものを目の当たりにするからです。

改めて考えてみてください。福音とはいったい何でしょう？パウロはこのように明白に教えてくれました。Iコリント15：1-5で彼はこうまとめていました。「:1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。:2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。:3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、:4 また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、:5 また、ケパに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」と。福音というのは、私たちの罪のために救い主

イエス・キリストがなしてくださった救いのみわざでした。忘れてはいけません、私も、あなたも、ここにいるひとりひとは聖なる神様の前に罪を犯した罪人でした。例外はだれもいません。本来であれば、神様によって造られた人はみんな、造り主である神様だけを愛して、神様だけに仕え、神様にだけ喜びを見出し、神様だけを礼拝する存在でした。しかし、そんな私たちが神様に逆らったのです。神様を愛するのではなく、それ以外のものを、いや私たち自身を愛するようになり、造り主の代わりに作られたものに仕えるようになりました。こうしてすべての人は罪を憎まれている、義の審判者である神様に対して罪を犯したのです。そしてその結果は、当然小さなものではありませんでした。罪は神様との間にあった関係を壊しただけでなく、神の敵となった私たちはみんな必ず罪に燃え上がる神様の御怒りと正しいさばきを受け、永遠に苦しみ、滅ぼされる者となったのです。「すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けること」（ローマ3：23）はできませんでした。

しかし、そんな罪深い敵であった私たちのために、ほかのだれでもない神様ご自身が愛を示してくださいました。神の御子イエス・キリストをこの世に送ってくださったのです。この方は完全な神として、完全な人としてこの地上に来られ、完全な生涯を歩んだその後、十字架にかかられました。そしてその十字架の上で、本来なら私たちが受けるべき罪の罰を、苦しみを、永遠のさばきを代わりに受けてくださいました。父なる神の燃える御怒りのすべては、御子の上に注がれたのです。私たちにはどうすることもできなかった罪の代価を御子は、十字架の死という、ご自身のいのちをささげるといふ大きな犠牲を払うことによって支払ってくださいました。また死んですべて終わりではなく、この方は約束されていたとおりに3日目に死からよみがえって、天に上り、そして今もなお変わらずに神の右の座につかれています。救いに関して罪人の私たちにできたことは一つもありませんでした。最初から最後まですべてが神様の恵みのみわざでした。そして私たちはただキリストが成し遂げてくださったこのみわざを信じる信仰によってのみ救われたのです。自分自身の罪深さを素直に認め、ただ主のあわれみを心から求めて、自分の罪の代わりに十字架にかかって死んでくださったキリストにただ信頼しながら、私たちは歩んでいこうとするのです。あわれみ深い神様がこんな約束を与えてくださっていました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネ3：16）と。

果たして私たちは、今、このキリストの福音のうちに示されたキリストの犠牲的な愛というものを本当に知っているのでしょうか。驚くほどに深いその主のあわれみというもの、それに対する感謝や賛美は日々増し加わっているのでしょうか。それにいっさい値することのない者に示されたキリストのみわざ、主の恵みの力というものは私たちには到底測り知ることはできません。罪の中に死んでいた私たちに、新しいいのちをもたらしてくださった御子の死。敵対していた私たちを完全に和解させ、神様との平和を持つようにしてくださった御子の犠牲。生まれながらに御怒りを受けるべきだった私たちを、神様の子どもとしてくださった御子の贖い。罪の奴隷だった私たちを解放し、義の奴隷としてくださった御子のよみがえり。この世にあって何の望みもなく永遠のさばきのみ値した私たちを救い出し、天へと続く永遠の希望を与えてくださった御子の十字架。確かにこのキリストの福音のうちにこそ、それを信じるすべての人の罪を赦し、その者を完全に造り変えることのできる圧倒的な力があるのです。だからまさにパウロの言うことばのとおりでした。パウロは言っていました。「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」（ローマ1：16）と。福音には神の力が明らかにされていました。それこそが私たちひとりひとりにとっても歴史上最も重要な、最も最高の良い知らせでした。この福音がなければ、私たちには何の希望もなかったのです。

かつて宗教改革の中心として活躍したジャン・カルヴァンも次のようなことばを残していました。「福音がなければ、すべてが無益で空虚です。福音がなければ、私たちはキリスト者ではありません。福音が

なければ、あらゆる富は貧しさに、あらゆる知恵は神の前で愚かさに、強さは弱さとなり、人の義はすべて神の御前で有罪と裁かれるのです。しかし、福音の知識によって、私たちは神の子どもとされ、イエス・キリストの兄弟とされ、聖徒たちと同じ町に住む者、天の御国の市民とされ、キリストとともに神の相続人とされます。キリストによって、貧しい者は富む者とされ、弱い者は強くされ、愚かな者は知恵ある者とされ、罪人は義とされ、孤独な者は慰められ、疑う者は確信を得、奴隷は自由とされます。これが信じるすべての人を救う神の力なのです。」と。この福音の価値というものを、本当に知っているでしょうか。この福音の持っている力に対する驚きは増し加わっているでしょうか。福音は単に私たちに天国行きを約束してくれるチケットではありません。福音は私たちを救い、キリストに似た者へと変え続けてくれる神の恵みの力でした。このキリストの福音を知り続けて、キリストとともに歩み続けていくことは、私たちにとって何よりも大きな喜びとなっているのでしょうか。この福音を手に行っていることの喜びや感謝や満足は増し加わっているのでしょうか。パウロ自身はその喜びを心から知っていました。だから同じピリピ3：8で「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとおもっています。」と、彼は言いました。何事にも代えがたいキリストの福音、これが私たち信仰者の歩み、福音生活において決して揺るがされない基盤でした。私たちはみなここに立っているのです。

### 3. 福音生活の描写 27c節

そして、ここに立った上で、歩んでいく信仰生活、福音生活の最後三つ目の要素は、福音生活の描写でした。パウロはこの1：27で、福音を実際に生きていくということ、具体的に生活していくということがどのような姿なのかというのを、ある一つの特殊なことばを用いてここに描いてくれました。

#### ▶「生活しなさい」(ポリス：「都市」・「市民」)

そして、そのパウロが用いていた描写というのは、「市民」でした。27節の続きをよく見てください。「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい」と記されていました。この箇所を読んだ時、これまでに何度も何度もほかのパウロ書簡を読んできた人たちは、もしかしたら小さな違和感を覚えるかもしれません。というのも、パウロはほかの箇所でもよく用いてきたことばをここではあえて使っていませんでした。たとえばパウロは同じようなことをエペソの信仰者たちにも訴えていましたけれども、エペソの信仰者たちにはこんなことばを用いました。エペソ4：1では「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」と、エペソの信仰者にはパウロはこう言いました。同じようなことをコロサイの信仰者たちにも言います。コロサイ1：10では「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」とパウロは祈っていました。エペソ、コロサイだけではありません。テサロニケの信仰者たちにも同じでした。Iテサロニケ2：12を見ると、同じように言われていますが、こんなことばを使っています。「ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」と。パウロは同じように、「その召しにふさわしく」、「主にかなった」、「神にふさわしい」生活をしていくように、生きていくようにと言っていたのですけれども、この三つの箇所に通して用いられていたことばは「歩む」ということでした。「歩いていく」という描写を用いたのです。パウロは救われた者たちがその後も日々信仰者として忠実に生きていくことを表す場合、求める場合、多くの場合で「歩いていく」という表現を用いていました。

でも不思議なことに、このピリピの箇所では違っていました。彼は「歩みなさい」ではなく、「生活しなさい」ということばを使ったのです。また加えて、この「生活しなさい」ということば自体も非常に興味深い意味を持つものでした。この「生活しなさい」と訳されていることばは、もともと「都市」や「市民」などを意味するギリシャ語“ポリス”に由来するものでした。そしてここからこのことばが派生して、「市民として生活する」とか「都市の住民として義務を果たす」といった意味が含まれていました。いっ

たいどうしてパウロは、ピリピの信仰者たちに向かってほかの教会と同じように「歩みなさい」と言わなかったのでしょうか。なぜ彼らには代わりにキリストの福音にふさわしく、市民として生活しなさいと口にしたのでしょうか。何となくだと思います？たまたまだと思います？もちろんそうではありません。その理由は、ピリピの教会の置かれていた状況にありました。もっと言えば、それはピリピの町の人たちが、ローマの植民地としての自分たちの立場を愛して、自分たちに与えられたローマ市民としての権利や特権を大いに誇っていたからでした。おそらくこの感覚というのは、今の私たちにはあまりピンと来ないかもしれません。今の時代というのは、自分の住んでいる町や都市に対して何の愛着も感じないというような人たちが結構います。調べるまで私も知りませんでした。実際、数年前に行われた調査によると、多くの人たちが住んでいるこの堺市を魅力や愛着の感じる町だと思っている人たちの割合は、全体の約60%に過ぎませんでした。全員が全員、愛着を持っているわけではないのです。また仮に、もし私たちが思いやりとか一市民としてその町に愛情を持っていたとしても、自分の時間や労力、そういったものをすべて毎日毎日町のために注ごうとは多分しないでしょう。でも覚えていてほしいのは、この時代は違ったということです。昔の人たちにとっては、自分たちの住んでいる“ポリス”、都市というのは、彼らにとってすべてだと言っても過言ではないほど、大切なものだったのです。

ジェームズ・ボイスというひとりの注解者もこのような説明をしてくれていました。「現代では、人が都市に住みながらも、その都市に何の愛着も抱かないということがあり得ます。……しかし、ギリシャのポリスに住む市民にとって、それはあり得ないことでした。ポリスは人生そのものだったのです。都市の法律は彼らの一部であり、都市の慣習は誇りに思うものでした。彼らは都市の全てを熟知しており、住民のほとんど全てをも知っていました。都市は彼らに完全な忠誠を求め、彼らも喜んでそれに従いました。彼らにとって、ポリスは人生で最も価値あるものだったのです。」と書いています。彼らにとって、市民権を持っているということ、市民として生きていくということは誇りに思うものでした。しかもすごいのは、このピリピの町は、実際にはローマから数千キロほど離れた場所にあるのに、彼らはまるで自分たちがローマ市民かのように、誇り高くふるまっていました。ラテン語を話していたり、ラテン風の衣服を身につけたり、ローマの慣習や風習に傾倒していたのです。この町に住んでいる市民たちは、誇りを持っていました。その誇りは大いにふくれ上がっていたでしょう。実際、パウロがピリピの町を訪れて、占いの霊につかれていた若い女奴隷から霊を出したその後のことを覚えていますか？儲ける望みがなくなった彼女の主人たちは怒って、パウロたちを訴えてこんなことばを口にしていました。それが使徒16:20-21に書かれています。「:20 そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、:21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」と。「ローマ人である私たちが」と、ピリピの町は自分たちの特別な地位に思い上がっていました。ローマ市民であるということは何よりも誇り高ぶっていました。彼らの人生においてこの市民権こそが最も価値のあるものとなっていたのです。

そして想像してみてください。パウロはこんなピリピの町の様子を当然よく理解していました。だから彼がペンをとって、この町の信仰者たちに向かって手紙を綴ったその時、今回のことばを書き送ったのです。兄弟姉妹の皆さん、あなたがたも以前はローマの市民であることを愛していたかもしれません。また今も周りではその立場や特権を誇りとしている者たちであふれているでしょう。そんな状況の中で、かつて自分が喜びを見出したその慣習や文化やたいせつにしていた生き方に心が奪われてしまうこともあるかもしれません。でもね、あなた方はキリストの福音によって救われて、もう新しく造り変えられました。あなたがたの国籍は今や地上ではなくて、もっとすぐれたところにあります、あなたがたの国籍はここではなく天にありますと。だからこそ、たった一つ、どんな時も、何をするにしても、キリストの福音にふさわしい生活をしていなさいと。本当の住まいではない、この地上のことにではなく、今市民権を持っている天のことを愛する市民として生きていきなさいと。ピリピの信仰者たちはパウロが何を言わ

んとしているのかよくわかりました。彼らもかつては別のものに価値を置いていたのです。彼らの思いは地上のことに向けられていました。地上の習慣、文化、地上の律法、生き方、そういったものに従って、そこに喜びを見出そうとしていました。地上で持っているその市民権こそが彼らにとって最も価値ある重要なものだったのです。でもそのすべてがキリストの福音によって変えられました。彼らはローマ市民である以上に、キリスト者になったのです。この世の王やその権威に従う以上に、すべての主、王の王、救い主イエス・キリストに喜んで従う、恵みによって罪赦された者になったのです。地上に住む住人である以上に、天に国籍を置く天国民となったのです。だからこそ彼らはキリストがもたらしたその現実というものに、ふさわしい生き方をしていく必要がありました。かつてのものを横に置いて、造り変えられたものとして新しく生きていく必要がありました。これまで持ってきたこの世の習慣も、これまで持ってきたこの世の文化も、これまで持ってきたこの世の律法やこれまで持ってきたこの世の生き方ではなく、天国民として福音の習慣を、福音の文化を、キリストの福音にかなった生き方をしていくことが常に求められるようになったのです。

そして、これは今の私たちも同じです。感謝なことに、キリストの福音を信じ受け入れた私たちはみんな同じようにして天に国籍を置く者として、もう新しく造り変えられました。私たちは日本人である以前に天国民として生きています。アメリカ人である以上に天国民として生きています。この世にのみ価値を置いて、この地上の歩みだけがすべてだった、そんな以前の生き方はもう終わりを告げました。私たちはただ主の恵みによって、キリストを王とする本当の住まいを天に持っている天国の市民として、今を生かされているのです。私たちは新しい王に仕える者になりました。私たちは、私たちを救い出してくださった偉大な王に従う者に変えられました。そんな私たちに関われる責任は、当然自分を愛してくださったその主を心から愛して、いつかこの方に会うその日を楽しみにしながら、キリストの福音にふさわしく生活していくことです。同じピリピ3：20で、パウロはこう言っています。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と。ある人は思っているかもしれませんが。私たちは天に国籍を置く者になった、それはすばらしいと。

では具体的に今どのようにして歩んでいけばいいのでしょうかと。もしそのことを知りたいのであれば、そのピリピを記したパウロの姿を見てみることで。このピリピの中にもいろいろな箇所その姿を見て取ることができます。たとえばピリピ1：20を見ても、天に希望を置いていた、天に国籍を持っていたパウロはどのようにして生きていたか、何を願っていたかがわかります。「：20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。」と。天に国籍を置いていた者にとっては、この地上でなすべきことはシンプルでした。パウロは最高の福音を喜んで伝えよう、生きることになろうが、死ぬことになろうがそんなことはどっちでもいい。あがめられるべきお方が、自分の新たな王がほめたたえられること、宣べ伝えられること、福音のすばらしさが宣べ伝えられることを喜んでなしていこうと、そのようにパウロは歩んでいました。それだけではありません。ピリピ2章を見れば、イエス・キリストのへりくだりの例を私たちは見て取ることができます。パウロの頭にはキリストのへりくだりの例が常にあったことは言うまでもありませんし、また3：12－14を見ても、主にお会いすることをわかっていてパウロは何を願っていたか書いていました。「：12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。：13 兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、：14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」と。パウロが望んでいたことは、ただ一つでした。キリストをますます知って、キリストのために忠実に歩んで、そして最後、そのゴールラインを切るその時までには、このキリストをあがめる者として、礼拝す

る者として、このキリストを感謝する者として、このキリストを喜ぶ者として歩み続けることだったのです。ピリピ人への手紙やそれ以外の聖書箇所も私たちに教えてくれています。天に国籍を置いている者は、この地上のことではなく、天のことに関心を払うのです。

だとすれば、果たして私たち日々歩んでいますけれども、私たちの関心や焦点というのは、いつもどこを向いているでしょう。どんなものに私たちは時間や労力、お金というものを費やしているでしょう。私たちの考えや、私たちの思いや、私たちの生き方は何によっていつも影響を受けているでしょう。この地上のことでしょうか。それとも天のことでしょうか。救われる前と救われた後、天に国籍を持つ者となった者として、生き方は変えられているでしょうか。

最後に一つだけ、今私たちは天国民として歩むことを見ました。では、天国民としての歩みというのは、いつから始まるのでしょうか。天に国籍を置いた者としてのその生活は、いつから始めるのでしょうか。この地上での人生を終えてからでしょうか。天国に行ったその時からスタートするのでしょうか。いえ、そうではありません。天国民としての歩みというのはもう始まっています。神様を知って、主に似た者へと変えられ、主の栄光を現し続けていくというその歩みは、キリストの福音を信じたその瞬間からもうすでにスタートしているのです。私たちは天国に行って天国民になるのではありません。私たちは天国民としてこの地上を歩み、そして天に行くのです。だから私たちは主にお会いするその日まで、その時を楽しみにしながらも、残されたこの地上での日々を王である主のために歩み、いつも天にあるものを思って、天に宝を積む者として忠実に歩んで行こうとするのです。もちろんその歩みにはさまざまな葛藤や試練も待っています。罪との戦いも経験しますし、私たちの目をすばらしい主から、福音から逸らせて、かつての生活に戻そうとするそんな誘惑もあるでしょう。そんな戦いがある中で、では私たちはいったいどうしたらいいのでしょうか？そんな時こそ、私たちにとって最も最高の知らせであるキリストの福音に立ち戻り続けることです。私たちがキリストの福音に戻る時、そこにははっきりと示されたキリストの偉大さを見ます。私たちが今仕えているそのキリストのすばらしい愛に、恵みに富んだその姿を見ます。神様の恵みの力をそこに私たちは目の当たりにするのです。そしてそこに目を留め続けながら、いつかその方にお会いする、その日を期待して、一日一日を福音にふさわしく生活していくのです。

パウロは福音を知っていました。パウロも忠実に歩んでいたのです。でも時に、福音を正しく歩いていくその道から外れてしまうことがありました。あのペテロですら道を外すことがあったのです。その時に彼を助けたものは何だったでしょう？確かに私たちはキリストの福音に自分自身が目を留め続けることは大切です。それでもなお忘れてしまうことがあれば、その時に必要になるのは何でしょう？ペテロを助けたのは、同じようにして福音を堅く保ち続けようとしているパウロでした。ペテロにもパウロが必要でした。私たちにだれも要りませんと言うことは、おかしな話です。私たちがキリストの福音に立って堅く歩み続けていこうとするのであれば、福音に戻るようにと励まし続けてくれる、祈り続けてくれる、支え続けてくれる、そして時には愛を持って戒めてくれる兄弟姉妹が欠かせないと言うのです。それが福音に立って生きていく信仰者としての歩み、そしてそれが教会としての歩みでした。福音生活——福音に生きていくということ、それが教会にとって欠かせない二つ目の柱だったのです。ですからぜひ皆さん、このみことばをいつも心に留めて、この一週間も天に国籍を置く者として、福音の道に堅く立って、どんな時もキリストの福音を生活する者としてともに成長していきましょう。